

1. むらづくりの主体

(1) 名 称 ふりがな おおさき かい 大崎そばの会

(2) 所在地 ふりがな にいがたけん さどし はもち おおさき 新潟県佐渡市羽茂大崎 1 5 7 8 - 1

(3) 地区の規模 集落の集合体

(4) 組織の性格 機能的な集団

(5) 代表者の氏名 ふりがな かわかみ こうき 川上 公紀
役職 会長

2. 地区の概要

総人口	農業就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
244人	106人	93戸	ha	63ha	0ha	ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第Ⅰ種兼業農家	第Ⅱ種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
57戸	54戸 (%)	21戸 (%)	3戸 (%)	30戸 (%)	10戸 (%)	20戸 (%)	24戸 (%)
地域指定状況			農業地域類型区分				
農振、過疎、特定農山村、離島			市 町 村		当 該 地 区		
			中間農業地域		山間農業地域		

3. むらづくりの内容及び成果

(1) 地域の沿革と概要

ア 地区の位置

新潟県佐渡市は日本海に浮かぶ総面積 855 km²の離島であり、一島が一市となっている。そのうち本地区は島の南部に位置し、旧羽茂町の市街地から羽茂川の約 5 km 上流にあり、南北 2 km、東西 4 km の総面積 304ha、7 集落（第一、上城、向城、中央、下組、諏訪、大草）、93 戸（うち農家数 57 戸）からなる、日本の原風景ともいえる美しい農村景観を残す山間の地区である。



図 1 位置図

イ 地区の農業

当地区では、昔から傾斜地にそばなどが栽培され、主に自家消費され、現在水稲をはじめ、特産のおけさ柿、自然薯、しいたけの栽培や地域特性を活かした野菜の採種が行われている。また、平成 12 年から地区内の 3 集落が中山間地域等直接支払制度に基づく集落協定を締結し、農地保全や共同取組活動を行っている。その他水稲生産の補完組織として、東大崎営農組合（機械・施設の共同利用組合）や大崎ヤングプラント（育苗受託組織）がある。

(2) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機・背景

当地区では古くから自家用にそばを栽培しており、手打ちの大崎そばは、母から娘へ、姑から嫁へと受け継がれてきた。この大崎そばは傾斜地でのハリカケ畑（焼畑）で栽培し、実は天日乾燥して保存、必要な時に必要な分だけ石臼で挽いてそば粉にし、つなぎを一切使わずに作る方法がとられ、のどごしが良くコシが強い「大崎そば」が生まれている。



しかし、インスタント食品の普及で、大崎地区でも家庭でのそば打ちの機会も減少していった。昭和 53 年、町の婦人会幹部と社会教育指導員が中心となり、「本物を見直して、昔ながらのそばをみんなで味わおう。必ず本物は人を惹きつけ、人が集まるはず。やってみよう。」との思いから、第 1 回「そ

ばの会」(イベントの名称。以下、同じ)を羽茂公民館で開催した。

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

当初は有志(37人)で始めた会だが、会場は第2回「そばの会」から大崎地区に移り、併せて、郷土芸能を披露するようになった。第1回の講師として迎えた大山満蔵氏(古民謡継承等の文化芸能活動に尽力。郷土芸能「ちょぼくり」復興の第一人者)の呼びかけにより、地区住民による「大崎そばの会」が創設された。

第4回「そばの会」からは、「大崎そばの会」が主催、10回目までに徐々に運営主体は大崎地区に移行し、地区住民の手によって主催されるようになり、その過程で区内の集落や住民に広く呼びかけることで、会員だけでなく、当日の会場運営や交通整理、食材提供、集落環境整備等も含め、「そばの会」開催を支援する集落ぐるみの取組へと発展していった。



「文弥人形」の上演

ウ 現在に至るまでの経過等

昭和53年	12/17 第1回「そばの会」を開催。参加者37人。 町婦人会及び社会教育員の藤井三好氏が主催。参集者は町長、教育長、「アンポンタンクラブ(野鳥の会)」、「佐渡山岳会」「相川草の会」。羽茂公民館で開催。そばに加え「そばべっとこ」「そばどじょう」「メカス飯」等を提供。
昭和54年	2/24 第2回「そばの会」を開催。 大崎公民館で実施。そば、キビ団子提供。
昭和55年	12/21 第3回「そばの会」を開催。大崎地区でのそばの会が定着。大崎座が文弥人形上演。「大崎そばの会」が設立。
昭和56～ 平成元年	「大崎そばの会」「羽茂公民館大崎分館」が主催。
平成4年	第15回より、参加者の増加に対応するため、定例会は年2回開催となる。現在は通常年5回開催。
平成8年	通称「そば会館」とも呼ばれる「大崎活性化センター」が落成。
平成16年	みなし法人(人格のない社団)として、定期給与と歩合制を組み合わせた運営体制を整備し、会の会則を制定、役員会を開催。
平成19年	30周年事業の実施(記念誌の作成、手ぬぐいの配布)
平成23年～	観光協会による「さど食の陣」参加

(3) むらづくりの推進体制

ア 大崎そばの会の組織の体制、構成の状況

- ・ 構成員 26名
- ・ 総会 年1回

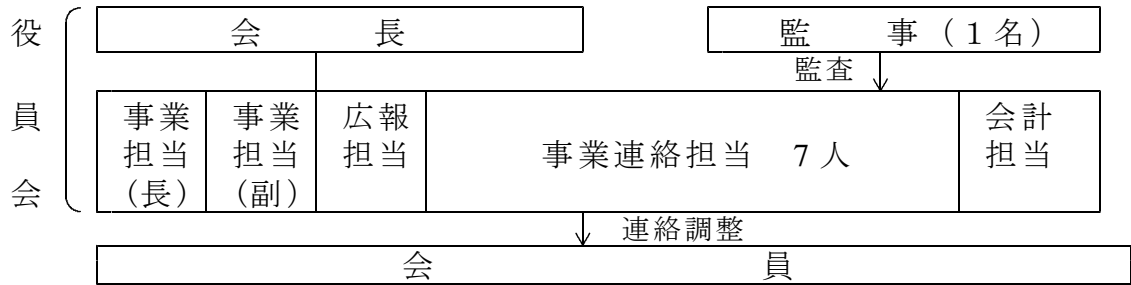
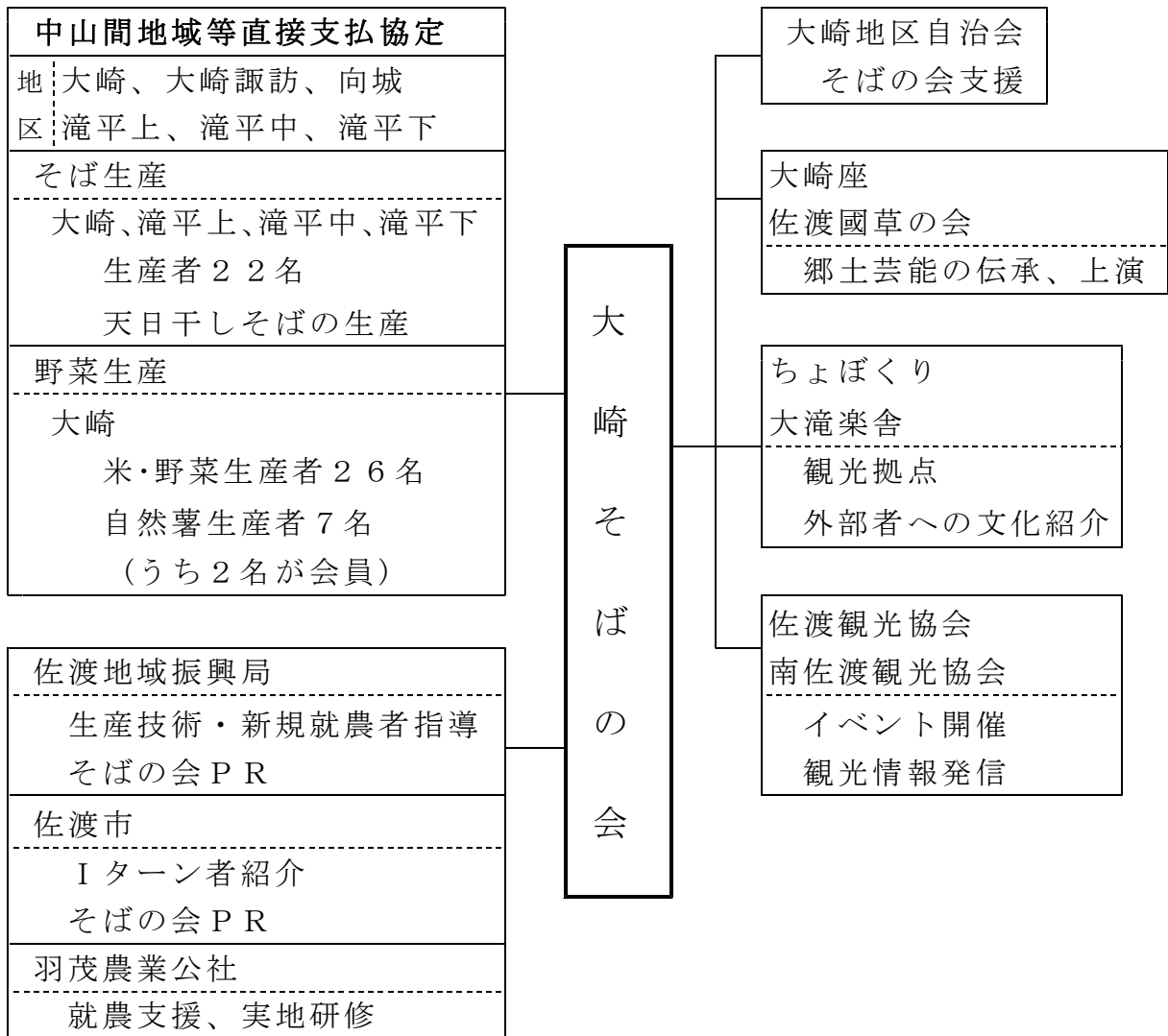


図2 推進体制図

イ むらづくりに関して、各集落の住民の当該集団等や連携する他の組織、団体との関係及び参加状況



【「そばの会」・イベント出展等実績】

	平成 24 年	平成 25 年	備 考
「そばの会」開催回数	延べ 61 回	延べ 51 回	うち定例会 5 回

(4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

ア 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取組状況

会では、山間地産のそばにこだわり、玄そばの安定確保のため、地区内の中山間地域等直接支払協定参加者に対しそば生産を依頼、不足分は周辺の滝平地区から玄そば供給（全体量の1割程度）を受けている。

◎【「大崎そばの会」に玄そばを供給しているそばの生産者数】

〔生産者数〕 22名（うち大崎地区18名）

収穫したそばは、天日干しで乾燥させることで購入価格を高く設定し、地区のみならず周辺地区に対しても、経済効果が及ぶとともに、「そばの会」で使用する野菜や山菜などの食材は、会員や地元農家から買い上げることによりほぼ100%が地区内で生産され、所得の確保につながり、加えて、「そばの会」の開催時にそば会館内において地元産の民芸品、米、野菜、加工品等を販売している。

イ 当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

「そばの会」参加者の増加に伴い、転作田や遊休農地を活用したそばや野菜の生産が増え、地区内の農地保全につながっている。また、定例の「そばの会」の開催によって大量の食材が必要となり、会員間で野菜の作付けについて分担して生産する体制が出来ている。

また、会が野菜の生産・調整に係る事務を一部肩代わりすることで、そば生産に対する農家の意欲を向上させている。

ウ 当該集団等の活動による構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況

「そばの会」開催時に、米や野菜、山菜等を販売する直販コーナーを提供することで、何倍もの付加価値が付き、その利益が会員のみならず地区全体に還元されている。

農業生産面では、地区内には12人の認定農業者がおり、うち2戸が法人化するなど担い手は確保されつつあり、島内の4Hクラブと連携し、平成25

年度から島内産の薬味（トウガラシ）を供給するプロジェクト活動を開始するなど、若手農業者の活動を支援している。

会の活動を支えているのは、「主に50代から70代までの女性の力」であり、地区の女性らが、そばを打ち、田舎料理を作り、舞台上で郷土芸能も披露するなど女性の力がおいに発揮されている。



(5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

ア 生活・環境整備面の取組状況

地区にゆかりの長塚節の第2歌碑建設に関わるとともに、中山間地域等直接支払交付金を活用し、法乗坊の桜と小集会施設である阿弥陀堂及び大坪の石塔を含む、そば会館周辺の美化活動に努めている。同時に活動史といえる村内文化史の編纂、文化伝承など集落生活の質向上に向けた取組を積極的に実施している。

イ 当該集団等による生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与状況

大崎そばの人気や知名度が高まるにつれ、有志5人が集まり処「ちょぼくり」を開設した。同直食所は、通年で大崎そばを提供しており、島内外から訪れる客ほか、近所のお年寄りの憩いの場や都市住民等の交流の場としても利用され、コミュニティ活動の強化につながっている。平成23年に展示施設「大滝楽舎」も設置され、地区を訪れる人が増え、佐渡・大崎の文化に触れる場を提供している。

平成24年度の「そばの会」の客構成としては県内96%、県外4%であり、県外客の多くは首都圏からの参加となっている。さらに、上越市および首都圏の大学と連携して、年2～3回程度、伝統芸能の実地研修として学生の受け入れ（1回20人程度）を実施している。



ウ 当該集団等の活動による地域への定住促進状況等

佐渡市や羽茂農業振興公社が定住促進や新規就農者の受け入れを進めている中、定住や就農を希望するIターン者に対して「大崎そばの会」を現金収入を得る場として、参加を呼びかけている。

会を支えている「主に50代から70代の女性の力」は、郷土料理、郷土芸能の文弥人形、ちょぼくり、カニ舞い、鳥刺し、御万歳、相撲甚句などやおもてなしの心は年配者から次世代へ脈々と伝承されている。